

【全日本建設技術協会】

## 平成22年度 奈良市建設技術協会研修会 報告書

- 1 日 時：平成22年7月9日（金）13:30～16:30
- 2 場 所：奈良市役所 北棟6階 第22会議室
- 3 出席者：建設部長、都市整備部長を含む47名  
（全建会員総数 184名）
- 4 講 師：神戸防災技術者の会（元神戸市職員）、NPOメンバー  
京都市建設局土木管理部長、NPOメンバー  
神戸市クロスロード研究会理事（元神戸市職員）  
NPO法人都市災害に備える技術者の会

### 5 研修内容

#### (1) 会長挨拶（13:30～13:40）

災害発生時に市職員が適切に行動できるよう日頃から対策を立てているが、実際に発災した場合には訓練通りには行かないと思う。本日の研修を糧にして欲しい。

#### (2) 「巨大地震災害時に市職員はどのように動いたか～阪神・淡路大震災時で体験したこと～」（13:40～14:40）

配布資料に基づきパワーポイントで説明。

説明項目は次の通り。

- ① はじめに
- ② 「震度7」その瞬間は
- ③ 自分は「安全か」
- ④ 「救出」か「出勤」か
- ⑤ その時の「市役所」は
- ⑥ 救出は「誰」が
- ⑦ 「応急対応」と「復旧事業」は
- ⑧ 被災した街の「復興」は
- ⑨ おわりに



講演風景

主な指摘事項は次の通り。

- ・ 神戸防災技術者の会（略称 K-T E C）との連携呼びかけ
- ・ 発災時の被災状況紹介
- ・ E-ディフェンスでの耐震補強有無家屋の実験紹介
- ・ 直下型地震では机の下に逃げる間がなく、立ちすくむのみの状況だ。
- ・ 耐震診断を受けた家の実績は4%強である。
- ・ 発災当時神戸市職員の出勤状況は部署別に24～95%で平均41%であった。

- ・ 別ルートで出動して現況把握を行うといち早く被災状況が把握できる。
- ・ 被災報告では数値を求められる。
- ・ マスコミ対応の大切さが身に沁みてわかった。
- ・ 神戸市は政令指定都市であり、普段は兵庫県から独立した行政を行っているが、災害対応では兵庫県の指揮下にあり、指揮命令系統の円滑化を欠いた。
- ・ 震災後の技術職員には道路や橋など構造物の復旧対応のみではなく、その他の業務に対応することを求められる。(避難所の運営、仮設住宅の維持管理など)
- ・ 近年行政改革で省力化、人員削減が図られているが、その条件下で対応できるよう日頃から他の自治体と情報交換しておくことが災害時に役にたつ。
- ・ ハイパーレスキュー隊の訓練を見て市民は過剰な期待を寄せているが、80%以上は市民による救出である。
- ・ ビルが倒壊し道路を塞いだため、道路法68条を適用して個人の財産である建物を撤去した。道路法では撤去を考慮した項目は無く、無理やり68条を適用した。
- ・ 15年前は復旧に際し、随意契約で復旧工事を発注したが、公平性や競争性を重視することを要求される現在の発注方式の中で、緊急時にどのように対応するか検討しておく必要がある。
- ・ 水がなく、トイレが使えず困った。
- ・ 仮設住宅3万戸の建設用地は270ha(平城宮跡の2倍)を必要としたが、その用地確保に走り回った。
- ・ 街の復興である区画整理や再開発事業に住民の理解を得るのに大変な苦勞をした。
- ・ まちづくり協議会をつくり、住民が主体の2段階都市計画決定方式で実施した。
- ・ まちづくり協議会に派遣するコンサルタントなどは住民の推薦する人を選んだ

#### 質疑応答(14:40~15:00)

Q1: 瓦礫が2000万m<sup>3</sup>発生したとのことであるが、処理で苦勞された点は?

A1: 場所の確保に困った。木材は燃やした。(裸火)

簡易の焼却設備を設け埋立地で燃やした。

櫛形埠頭の間を埋め立て材料として使った。

Q2: 家族と取り決めておくこと。準備しておくことは?

A2: 懐中電灯をそばにおいておく。風呂の水を残しておく。スリッパを履いて避難できるように。

毎月1日には試験電波を発信できるので171伝言ダイヤルを使えるよ

うに練習しておく。

Q3：避難所で困ったことは？

A3：災害時要援護者が動くことができないため、家でじっとしていた。

名簿を作ろうとしたが個人情報保護法の壁があった。現在では手上げ方式で名簿作成に取り組んでいる。

要援護者が地域との接触がなかった点も反省点である。

要援護者から防災訓練に是非加えて欲しいという意見もある。

避難経路を複数知っておく必要がある。

健常者の中に車椅子を押したことがないという人が多い。

休憩（15:00～15:10）

(3) 「京都市の災害対応の取り組みについて～明日にかける橋・皆さんに期待すること～」(15:10～15:30)

配布資料に基づきパワーポイントで説明。

説明項目、指摘事項は次の通り。

①「防災・減災への誘い」

- ・自治体職員、技術者、間接的ではあるが被災者（母親の実家が淡路島にあり、家屋が壊滅）という3つの立場から阪神・淡路大震災以降、防災について関心を持って考えてきた。
- ・京都では大きな被害を受けなかったが、いつ起こるかもしれない災害に対して、普段から関心を持つよう自身も心がけ、他の職員にもそのように伝えるようにしている。

②きっかけづくりのヒント

1) 技術公務員の抱える課題

(技術力向上)

- ・技術の継承
- ・新技術の習得

以上の2点が大きな課題であるが、各職員の業務内容や得意とする専門分野と「防災、減災」は必ず、どこかで結び

ついていると考えている。防災

と言う切り口で自分の業務を見直せば、これまで見えなかった側面を見出すなど、技術力向上という面で新たな展開が生まれるものと期待している。京都市の職員にもそのように働きかけている。



講演風景

## 2) 防災へのアプローチ

- ・防災・減災WGの発足→K-TECとの連携

京都市でWGを発足し、本年2月にK-TECのみなさんにお世話になり、震災の生の体験をお話しいただいた。京都市の職員にも大きな刺激となるとともに、神戸市と京都市のネットワークの礎が築けたのではないかと考えている。

### ③防災つながりで輪を広げる

- ・「防災」への関心を高める（防災と日常業務の関連性を見つける）
- ・人材（財）育成と組織形態（防災に関心ある個人（職員）の発掘と育成）
- ・組織間のつながり（組織と組織の「つながり」から「絆」へ）

神戸市と京都市で職員間の結びつきができてつつあるが、このような結びつきをぜひとも奈良市とも築きたい。本日、私に与えられたミッションはこれに尽きる。業務上ではなく「志」のある方々同士の結びつきは、強い「きずな」になるものと信じている。

最後に、「一緒に学びましょう」と呼びかけた。

### (4) 「クロスロードゲームの説明と実体験」(15:30~16:30)

配布資料に基づきクロスロードについて、開発経緯、目的、ゲームの流れを説明した後、1グループ5人~7人（奇数）づつになり7グループに別れ実施した。

正解はない。1ゲームごとに何故イエスとしたか、またノーとしたかの考えを聞き、お互いが異なる考えがあるということを学ぶ。

時間の都合で4問しかできなかった。



講師によるクロスロードゲーム実習



クロスロード解説

## 6 研修後の感想

奈良市全建役員がまとめた受講者のアンケート結果は下記の通りである。

- 阪神淡路大震災を体験され、その経験を基にした講義であったので、説得力があった。
- 人としての本音の話もよくわかった。
- 今後発生する大震災に対しての心積りをしておくべきであると感じた。
- 公務員として震災時に出動するためには、自分の安全、家族の安全がなくては出勤できないので、家でも震災に対して、対策を講じておくべきであると感じた。
- 災害が起こったこと、被害が出ることに行政の責任の様な、マスコミ報道、住民の声が氾濫している昨今の状況の中、大震災等が発生した場合、市職員として活動するモチベーションを保つ自身がない。
- いつ、起こるか分からない大震災に備え、日ごろから防災の意識を持つことが大切であることを再度認識した。
- あらためて地震の怖さを感じることができた。また実際震災が発生した場合、出勤出来るよう努力したいと思った。
- 平素よりの危機管理意識をある程度満たしておく事で有事の対応が可能となる旨が、この研修で再認識した。
- 研修を受講して、自己の防災に対する意識がまだ欠如している事を実感した。
- 机上の考えだけでは、駄目であり臨機応変に対応出来るよう常に心がけたい。
- 災害発生時の行動を自分自身の中でシミュレーション出来たことが有意義であった。
- 緊急時、落ち着いて物事の判断が出来るように、予め取り決めに定めておくことや、上司との意思疎通をはかることが出来るような体制を作っておくことが重要だと感じた。
- 日頃からの業務においても災害時の事態の処理について考え、訓練をする必要があると感じた。
- 震災当時の被災状況については、TV のニュース、新聞などで知っていますが、同じ公務員の立場で、その時の思いや実際の行動した内容、その気持ちを伝えていただき大変参考になった。
- 震災時いかに、現場で即断、即決出来る判断力が必要なのか、我が下水道の緊急性の多い現場でも活かしたいと思う。
- 震災時に向けて、災害復旧に必要なデータ・書類は、バックアップを取っておくことや、災害時の指示命令をする県と近隣市町村との連携がしやすい環境を普段から作り上げていく事が重要だと感じた。
- 震災復興について、神戸だから出来た事（廃材を埋立地で処分したことや、下水処理場の代替として運河で処理をしたことなど）を聞くと、本市では、対応が難しいと思われる今後それらの対応について計画をたてておくべき問題点があると思った。
- 震災時での行動のしかた、心構え等を解りやすく講義していただいたのでとても、イメ

ーがしやすかった。

- 生命と財産を守り、福祉の向上を図るのが自治体職員の使命であるが、他人に対する意識や非常事態の想定などの意識が低く、これを機会に「どうやって住民を助けようか」「助かる命はなんとしてでも助けなければいけない」と思いました。競争する心も大事ですが、分かち合う心や助け合う心も大事だと思いました。
- 大震災当時、実際に現場で復興に携わった講師から体験談を聞くのは初めてで、大変参考になった。大震災が起こった時、市としてどう動くかは想像できない面もあるが、常に意識しておく必要は感じる。
- 大震災に備え、日頃から人とのつながりを大切にし、公助、共助、自助の下、みんなが一緒になって助け合える体制を築き上げなければならないと切に思います。そして公務員として取るべき行動というものも組織上はもちろんのこと、常日頃から考え、備えていかなければならないと感じました。
- 実際に大地震に直面したか否かで、市民・職員ともに防災への意識が全然違うんだなと思いました。
- 今回の研修において、実際に起こった大災害当日から現在の復興に至るまでの経緯を体験者として自ら語っていただき、行政としての立場、市民としての立場、また、必ずしもマニュアルどおりの対応では処理出来ない臨機応変の判断の難しさを教わりました。
- 防災についてある程度分かっていたつもりだったが、今回研修を受けてほとんど分かっていなかったと思いました。これからは、防災や減災を意識して仕事をしたいと思いません。
- 災害の時は、職員で出来る事は限定的である為、地域住民との普段からの関わりやコミュニケーションが必要であると感じた。
- 阪神淡路大震災から 15 年以上が過ぎ、その記憶も当時と比べ薄れてきていることを実感しました。平素からの啓蒙啓発の重要性を改めて認識しました。
- 直下型地震の恐ろしさというものがどうゆうものかよく分かった。もしその体験をした場合、情報やライフラインを確保するのに混乱することは間違いないと思います。研修を踏まえ、自主的に出来る自宅での非常時に対する備蓄品（電灯、水、食料品など）の備えを万全にしようと思いました。